





猿丸又左衛門と名乗り、安時の子安道の後裔といわれている。

(神戸市東灘区本山保久良神社宮司猿丸義也氏による。)

### 1.1 芦屋精道村の猿丸大夫末裔

猿丸安明翁の碑が芦屋川の公園にある。ちょうど阪神芦屋の駅を南に下って左側の岸に公園がある。まわりを松林に囲まれて、ちょうど高速道路の下の所にこの碑文があり、この写真は台風で天気が悪いので何て書いてあるか分からないが、その碑の内容である。「猿丸君彰功碑」が芦屋公園の中にあり、この人は明治5年(1872)から大正9年(1920)、49歳で亡くなっている。碑には、芦屋川改修、耕地整理などをし、それから、今のJR芦屋駅の創設、公共事業を企てて、率先して努力し、ご自分の意思を完結された、と書いてある。芦屋地区発展の基礎を構築した人である。最後に、当時の首相の犬養毅の題額、いわゆるサインがしてある。



図4 芦屋川公園内 猿丸安明翁の碑(筆者撮影)

猿丸安時翁というのは、どういう人か。「猿丸翁頌徳碑」というのが、阪急芦屋川の開森橋、その左岸の袂にある。この芦屋の地方は、江戸時代から水争いが絶えなかったために、安時が約20年以上かかって、奥池を築造されたと言われている。彼は1804年から1880年、77歳で没している。その碑が開森橋の所に建っている。この碑の内容に、どういう事が書いてあるのか読んでみる。

「猿丸翁頌徳碑」の碑文には次のようなが主碑が刻まれている。「津乃国蘆屋の里に猿丸安時翁といふあり 家世々村長なり 天保十二年翁の世と為るや 古来この地方の災害たる蘆屋川乃水を治めむことを志し 池溝をけずり堤防を築き辛苦二十年餘りにして其の目的

を達せり 此を以って災害一朝にして除かれ人仰ぎて神と称せり 翁明治十三年七十七歳にて没しぬ 村人敬慕の餘り 碑<sup>いしぼり</sup>を建てて長く其の功を傳えんとす 抑も翁は歌人猿丸大夫の裔なり 翁の如きは遠祖<sup>この</sup>の嗜みし歌道の誠を心として世を濟う道に尽くされたものと言うべし 嗚呼今より後も大夫の歌と共に功德の世に仰がることは蘆屋川の萬代に絶えざる如きものあらむ 大正五年十一月従一位勲一等 侯爵久我道久 篆額

この写真は奥池である。芦屋川を北へ上って行くと、芦屋の深い山にある。自動車ですら約2、30分はかかる所である。現在の芦屋市民の飲料水を供給しているのはこの奥池で、現在も使われている。

この碑を読んでみると、安時は自分一人では工事は出来ないで、他の人や村の人たちを集めて大工事を行ったが、気が遠くなるほどで、20年あまりで一時はもうやめようとする。村人もボランティアでやっていて、自分たちの為だが日々の生活があり、田畑も耕さなければならない。それをおして20年あまりで奥池を作り非常に苦勞した、ということが書かれている。奥池にこういう碑が建っている。



図5 開森橋左岸袂 安時翁の碑 (筆者撮影)

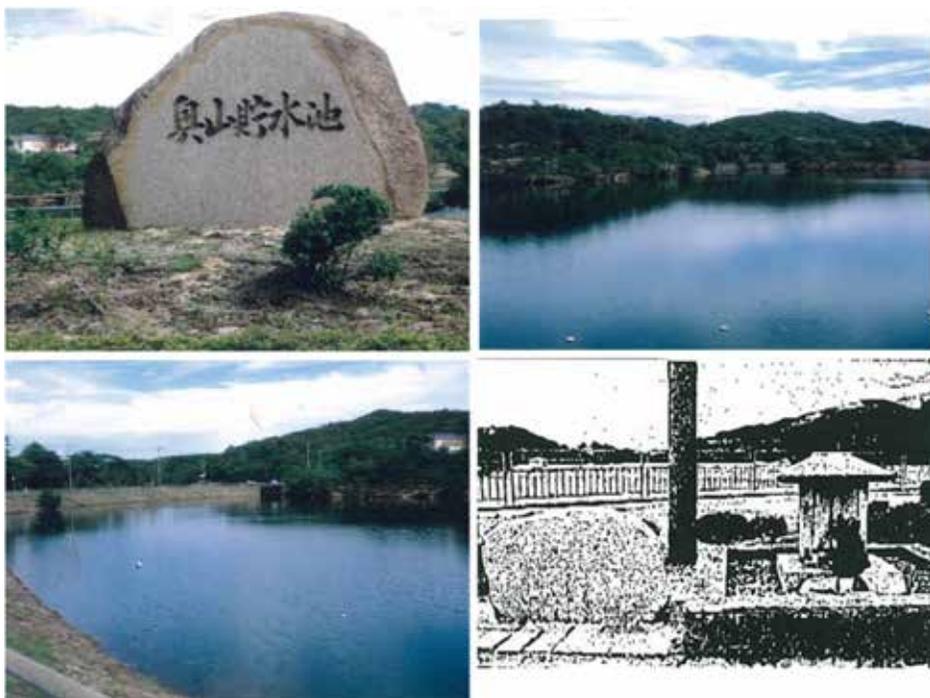


図6 奥池 (筆者撮影)

猿丸家の墓所は、阪急芦屋川の駅を下って北側にある。先ほどの開森橋より少し北に上がった所の右側に、猿丸大夫の墓があって、その台座の上。私は9月の終わりに訪ねたが、ちょうど墓所の入り口の門を修理しており、普段は鍵がかかって扉が閉まっていた入れないが、幸い工事をやっており扉が空いていた。それで中に入ることができたのである。普段は入れないが、いろいろ写真も撮らしていただき、ちょうど猿丸家の人もおられて話を聞いた。碑の内容は、この墓所の中に猿丸大夫の墓があり、その台座の上に自然石を建て、高さ2メートルの墓石書があって、正面に「南無阿弥陀仏」左右に「猿丸」と「大夫」と書き分けられている。安時、安道、安明、の墓石が林立している。16世紀頃、猿丸家一族が先祖菩提の供養塔としたのではないかと推定されている。方々に散らばっていた墓をここに集めたのではないかとされている。



図7 猿丸家の墓所 猿丸大夫の墓(左) 安明翁の碑(中央) 安道の碑(右) (筆者撮影)

左が猿丸大夫の墓。中央が猿丸安明翁の碑。右が猿丸安道の碑。安時の碑も墓所内にある。『摂津名所絵図』には「猿丸大夫古墳東芦屋の西、芦屋川の傍(たもと)にあり。高さ三尺ばかり、幅二尺ばかり。

御影石にして、中の六字の名号(みょうごう)、左に猿丸、右に大夫ときりたり。近年この辺より掘り出せしとぞ。

又西芦屋の里に猿丸吉兵衛と名乗る民家一戸あり。いづれも旧記なし。

その証分明ならず(証拠が分からない)。(摂津志)に言く、芦屋の里在原氏(業平)別荘の宅址(旧宅)を、土人(土地の人)呼んで猿丸大夫が旧第(昔住んでいた所)なりぞ。これ又つまびらかならず(はっきりした事は分からない)



図8 猿丸大夫木像(筆者撮影)

民族学者の柳田国男氏によれば、“天正十七年（1589）に「芦屋年寄中猿丸大夫」と書判している古文書があり、芦屋市に猿丸大夫の墓があって、猿丸宮（芦屋神社）という旧社あり”とあるので、芦屋に住み、猿丸家が古くから猿丸大夫の後裔と称して祭祀を執り行ってきたことは事実である。今でも芦屋に猿丸一族が多く住んでいる。私の知る所では、現在約30軒ぐらいじゃないかと思う。ある本を見ると芦屋に80軒とあるが、これは違うのではないかと思う。

もと芦屋天神社と称し、東芦屋町にあり、猿丸大夫の墓として伝えられる宝塔がある。猿丸大夫の末裔が天文年中（なかば）京都幡枝から移って来たたと柳田国男氏は述べている。

天神社は宇治田原の猿丸神社から勧請したのではないかと推測される。



図9 芦屋神社(左) 猿丸大夫の墓(右) (筆者撮影)

## 2. 猿丸神社（京都宇治田原町）

平安時代の末期、山城国綴喜郡“曾束（そつか）荘”（現在の滋賀縣大津市大石曾束町）に猿丸大夫の墓があったとされ、山の境界争論により、江戸時代初期にほぼ現在地に近い場所に遷し祀ったものと思われ、その霊廟に神社を創建したのが始まりである。又『撰津名所図会』には「猿丸大夫の後裔天文年中（なかば）山城国幡枝より撰津国芦屋に遷り、一族繁栄す」と書いてある。鎌倉時代前期の歌人、鴨長明は『無名抄』に「田上（たなかみ）のしもの曾束といふ所に、猿丸大夫の墓があり、庄のさかひにて、そこの券（札所の札）に書きのせられたれば、みな知る所なり」と書き留めている。又「気分が良く遠出をもよおす時は炭山、笠取を経て岩間寺や石山寺に詣で、蟬丸の旧跡や田上河をわたりて猿丸大夫が墓をたづぬ」と『方丈記』（1212）に記している。また、江戸時代、深草の元正上人（1623-1668）は「有猿丸祠。此亦大夫遊處之地。而村民奉祀也」（扶桑隱逸伝）と記している。

私がこの神社に寄ったのが10月の初めで、宮司の岡兵庫さんに会い、色々と神社の由来について聞いた。猿丸大夫は京都と滋賀県の県境 “曾束”に隠棲し亡くなったと伝承がある。この神社は、近世・江戸時代に入って以降、色々な病気が治ると言われ、特に瘤取りとか腫瘍などのできもの、癌封じの篤い信仰を集めている。この神社は人里離れた奥深い山にあり、寂しい所で険しい山の中にある。歩いては到底行けない所にある。最近は高速道路が出来、笠取というICで降りて行くことが出来るが、そこからでも山をぐるぐるとまわって約15分かかる所にある。

図10は猿丸神社の祠で、そんなに大きくはない。それから、猿の碑が左右に並んでいる。



図10 猿丸神社(京都宇治田原町)(筆者撮影)

図11は木の瘤で、大小色々ある。癌とかできものの病気が治ると、感謝の気持ちでこういう木を持ってこられて、お供えをする。もっと大きな物もあり、これが木の瘤かなと思われる物もある。



図11 大小の木のコブ(筆者撮影)

### 3. 猿丸大夫

猿丸大夫というのは、三十六歌仙の一人である。生没年不明、元明天皇の時代(661～721?)に活躍したといわれている。「猿丸大夫」という名は公的資料に登場せず、本名ではないとする説・実在を疑う説もある。皆様もご存知の通り「おくやまに もみじふみわけ なくしかの こゑきくときぞ あきはかなしき」これが『古今和歌集』215に載っている。『小倉百人一首』では猿丸大夫が詠んだと書いてある。しかし、『古今和歌集』では「よみ人しらず」とされ、詠んだ人が誰か分からないと書かれている。『新撰万葉集』にも漢文調で書かれているが作者は誰か書いていない。また三十六歌仙の歌集『三十六人集』の中の『猿丸集』なるものも、その内容は全く後人の手によるもので、『猿丸集』にある歌を猿丸大夫が詠んだものであるかは疑わしい、ということである。



図12 猿丸神社の絵馬と猿の人形(筆者撮影)

「猿丸大夫」という名については、公的史料に登場しないことから、本名ではないとする考えが古くからある。

- ①山背大兄王の子で聖徳太子の孫とされる「弓削王」とする説
  - ②天武天皇の子、弓削皇子とする説
  - ③道教説
  - ④二荒山（ふたらさん）神社の神職、小野氏の祖である「小野猿丸」とする説
- 以上、この4つの説がある。

猿丸大夫の墓と称するものは、摂津（芦屋）山城（宇治田原）以外にも、加賀（金沢）、越中（富山）、信濃（長野）、羽前（秋田）、岩代（岩手）、熊本、等の各地に散らばって伝承されている。近畿地方を中心に猿丸ゆかりの神社や旧跡が数多く残る中から、猿丸大夫

とは特定の人物を指すのではなく、氏神の祭主の資格を持つ人、或はその様な職種全体や団体を指す言葉ではないかと言われている。また吟遊詩人の様に各地で歌を歌いながら神事のような事を行っていた占い師的な人々かもしれないという説が、折口信夫、高崎正秀の説である。猿丸の逸話は方々にあつて、熊本にも碑がある。

「猿丸大夫」の読み方は、鴨長明の『方丈記』、『古今和歌集序注』には「サルマロマウチギミ」と読んでいる。これが江戸時代になると「さるまるだゆう」と読み、漢字で「太夫」と書く様にもなる。「大夫」は五位の官人（政府の役人）のことを称したが、中世ではもっと位の高い人物の様に見える向きもある。「マウチギミ」とは天皇のそば近くで仕える者、すなわち大臣や側近という意味である。

#### 4. 謎の猿丸大夫（柿本人麻呂の関連）

猿丸大夫を調べていくと必ず柿本人麻呂に突き当たる。哲学者の梅原猛氏が『水底の歌—柿本人麻呂論』において、猿丸大夫と柿本人麻呂が同一人物であるという論を発表した。いわゆる罪を得て処刑されたとする「人麻呂刑死説」。これは非常にセンセーショナルで、今まで考えられなかった様な事で、これを梅原氏は1973年に発表されている。人麻呂がなぜ刑死されたかという点、女帝・持統天皇と藤原不比等、二人の権力者が、政治的に人麻呂を肅清したと言われている。罪を犯しているのだから処刑されたとなっている。また、「人（麻呂）」から「猿」へと改悪され、悪い名前に変えられた。人麻呂の名前が抹消され、代わりに柿本猿留が記録されている。だから、梅原氏が言うには、猿丸大夫は柿本佐留であり、柿本人麻呂と同一人物であるのではないかと推測している。

では、なぜ梅原氏はそう推測されたか。現在の島根県益田市の沖合にあった鴨島が柿本人麻呂の臨終の地とされている。根拠は「万葉集」の巻2に掲載された次の5首の解釈にある。

- ・柿本人麻呂が石見国<sup>みまからむ</sup>で臨死<sup>いた</sup>とする時、自ら傷みて作る歌一首

◎鴨山の岩根し枕ける 我をかも 知らにと妹が 待ちつつあるらむ（巻2-223）

口語訳：鴨山の岩を枕に伏して死のうとしている私をそうとは知らずに妻はこうしている間も待ち焦がれていることであろうか。

- ・柿本朝臣人麻呂の死<sup>みまかり</sup>し時、妻、依羅娘<sup>よそみのをとめ</sup>が作る歌二首

◎今日今日と我が待つ君は 石川の貝に交じりてありといはずも（巻2-224）

口語訳：今日は今日とは私がお待ちしているあなたは、石川の貝に混じって、水の中だけというではありませんか。

◎直<sup>ただ</sup>の逢ひは逢ひかつましじ 石川に 雲立渡れ 見つつ偲<sup>しの</sup>はむ（巻2-225）

口語訳：直接会うことはできないでしょう。石川に雲よ立ちわたれ。せめて眺めてあの方と偲びましょう。

- ・丹比真人「名は欠けたり」柿本朝臣人麻呂が<sup>こころ</sup>意に<sup>なづら</sup>擬へて<sup>こた</sup>報ふる一首

◎荒波に 寄り来る玉を 枕に置き 我れここにありと 誰か告げけむ (巻 2-226)

口語訳：荒波に打ち寄せられて来る玉を枕もとに置き、私がここに伏せっていると、誰が告げてくれてことであろうか。

・或る本の歌に曰く

◎天あまざか離る 夷ひなの荒野あれのに 君を置きて 思いつつあれば 生けるともなし (巻 2-227)

口語訳：大和から遠く離れた荒びた田舎に貴方が行ってしまっていると思うと、私は恋しくて、そして、貴方の身が心配で生きている気持ちがしません。

以上、こういう悲痛な歌が残っている。

梅原猛氏は、鴨山は鴨島にあった山であり、その岩屋に罪人として閉じ込められていた人麻呂が処刑され、遺体は石川の河口付近に捨てられたと想定している。妻の依羅娘子は、夫の処刑を聞いて石川を訪ねたが、夫の遺骸はすでに水底に沈んでおりその姿は確認できない。せめて石川の上を流れる雲となってその姿を見せておくれと、悲痛な歌を返したと解釈された。

昭和 52 年 (1977) に梅原氏は、この自説を証明するために水没した鴨島を求めて調査隊による水中調査を二度にわたり実施。益田川の河口の沖合の“大瀬”の海底(広さ約 20 万平方メートル)を調査。水深の浅い所は 4 メートル、深い所は 5~6 メートルの所が拵がっている。井戸状の丸い穴 (ポットホール)、水深 8 メートルの同じ深さの所に数カ所。手拳大の礫の中に三角形をした三稜石があった。2 メートル四方の真四角石の集まり、丸い石の集まり、階段と思われる石が並んでいる所、敷きつめられた様に石が並んでいる所、柱や石垣や道に見える所がある。「やはりここは鴨島はあるんだという抜きがたい確信がある」と梅原氏は述べられている。場所は、島根県の西、山口県にほぼ近い所に益田市という所があり、高津川と益田川がある。その益田川の沖合に“大瀬”という所がある。そこを潜水夫を約 8 名ほど使い、大掛かりに調査したのである。陸上調査とは異なり水中調査は非常な困難が伴うため、十分な成果は得られなかったが、古来の伝承を科学的に調査する事、当時としては水中考古学の先鞭をつけたことで、貴重な体験をその後に残した調査であった。それから、梅原氏の著作から、益田市の高津と戸田 (とた) に、人麻呂を祀る柿本神社がそれぞれ鎮座しているとある。

鴨島は現在存在していない。万寿 3 年 (1026) 5 月 23 日、マグニチュード 7.6 の地震と大津波で沖合にあった鴨島が陥没して海中に没してしまった。梅原猛氏はその著書『水底の歌』で先人達によって築かれた人麻呂像を徹底的に批判して、抜き下ろしている。万葉歌人柿本人麻呂は罪を得て島送りになり、流刑地を転々として最後は益田市、高津の沖にあった鴨島で処刑されたとする新説を 1977 年に発表した。上下二巻に及ぶ梅原氏の人麻呂論は、読者を梅原史学の世界へと引きずり込み、十分に説得力のある説である。

奈良時代の五位以上の律令官吏であれば、官位の昇叙が必ず『続日本紀』に記載されている、とされる。『続日本紀』には柿本朝臣人麻呂の名はない。また『養老律令』の「喪葬令」には三位以上ならば「薨 (こう)」、先ほども出てきたが位の高い役人ならば「薨 (こ

う)」という字を使う。四位と五位ならば「卒（しゅつ）」、六位以下ならば「死」と書く。人麻呂が「死（みまか）る」と書いてあるという事は、罪人として処刑されてもおかしくはない、一つの証拠である。そういう身分や官吏の位によって死んだ場合には規定がある。契沖は、人麻呂が六位以下の微官（非常に下級の官吏）だったと断定している。

この人麻呂刑死説には最大の謎が残っている。これは私も思う。人麻呂が都を追われたその理由である。なぜ刑死までされたか、その理由は、梅原氏も『水底の歌』の中で明確に推測していない。柿本人麻呂が罪人となり、そのため名前を「人(麻呂)」から「猿」へと改悪されたのだと主張されている。そのため正史からは柿本人麻呂の名前が抹消され、代わりに柿本猿留が記録されている。

柿本臣（おみ）を名のる人物に、柿本猿留（佐留または猿？-708）がいる。彼が正史に登場する最初の柿本氏の人物で『続日本記』では元明天皇の和同元年（708）4月20日に従四位下で死亡している。ここで初めて猿丸＝猿留が出てくる。この人物こそが、政争に巻き込まれて皇族の怒りを買って、和氣清麻呂のように変名させられた（和氣清麻呂は別部磯麻呂と変名され大隅半島に流された）人麻呂ではないかとする説。猿留が死亡した時期と梅原氏が想定する人麻呂の死亡時期が一致する。そのため梅原氏は、この人物が人麻呂の別名ではないかとみている。

従四位下という官位は、中宮大夫ないし春宮大夫であったと推論されている。春宮大夫というのは皇太子の世話をする人である。謎の多い猿丸大夫と柿本人麻呂について哲学者の梅原猛氏が『水底の歌-柿本人麻呂論』において、同一人物との論を発表して以来、少なからず同調する者もいる。

梅原説は、過去に日本で神と崇められた者に尋常な死をとげたものはないという柳田国男の主張に着目し、人麻呂が和歌の神・水難の神として祀られたことから、持統天皇と藤原不比等から政治的に粛清されたものとし、人麻呂が『古今和歌集』の真名序では「柿本大夫」と記されている点を取り上げ、猿丸大夫が三十六歌仙の一人と言われながら猿丸大夫作と断定できる歌が一つもないことから（「おくやまに もみじふみわけ～」の和歌も猿丸大夫作ではないとする説も多い）彼を死に至らしめた権力をはばかり、彼の名を猿丸大夫と別名で呼んだ、と梅原氏は論じているのである。

梅原猛氏が人麻呂刑死説を唱えられたことから、色々な反響があった。まず反対意見として、「この歌は人麻呂の作ではなく、鴨山に伝わる伝説として人麻呂の死を後の人が代作したものであると思う。この意志を無条件に人麻呂の辞世の歌と決めてかかる事は、冒険と言わなければならない。」谷本政武氏。次に、高崎正秀氏は「人麻呂の墓というものが、石川の地にあったことを意味する以外、何の確実性を持たぬと思う。歌自身は共に疑義作であろう。」歌は偽物でないか、ということである。また、ある人の言葉では「人麻呂が自身の死を演じた歌謡劇である。その理解や後人の仮託であるという見方も有力である。」と言っている。しかし、梅原氏はこれに対して「万葉集自体も否定するのか。万葉集も否定するのは話が進まないじゃないか」と、この本の中で述べている。次に、柿本人麻呂が

都を追われ、追放されたと思われる理由は、はっきりした事は梅原氏は述べていないが、猿丸大夫が弓削皇子であるとされる伝承がある。『懐風藻』によれば、弓削皇子は文武帝の皇太子就任にあたり反対したが、文武帝の即位後3年にして弓削皇子は亡くなってしまう。そしてこの弓削皇子の死後まもなくして人麻呂の姿が都から消えている。この時、弓削皇子の兄である長皇子を（皇太子に）擁立する動きがあり、噂となってその事件に弓削皇子は死を命じられ、人麻呂は追放されたのではないかと思われる。それからもう一人、福井孝典氏の著書『天離る夷の荒野に』という本の中で、人麻呂と文武天皇夫人の藤原宮子と不倫をしている。そして宮子が産んだ首（おびと）皇子（後の聖武天皇）は人麻呂の子供だとしている。突飛な発想だがあり得る話である。

後世の猿丸大夫についてのイメージは、隠者である。隠者というのは人隠れして人里から離れて生活していること。藤原公任が明らかにした、猿丸大夫のものではないと思われる「奥山の紅葉ふみわけ 鳴く鹿の～」という歌を彼の歌としたのは猿丸大夫は山居（山奥に生活している）する隠者であり、この隠者の歌にふさわしい歌を『古今集』の詠み人知らずの歌から探した結果であろう。政府の高官が、なぜ山居する隠者になるのか、それは彼が政治的犯罪者で、彼が山に住むのは追放或は流罪の結果であろう。（梅原猛『水底の歌』）

もう一度猿丸大夫の歌といわれている「奥山の紅葉ふみわけ 鳴く鹿の 声きくときぞ秋はかなしき」を振り返ってみる。「ふみわける」のは、この歌を詠んでいる作者と考えられるが、逆に隠者の立場からみると、紅葉を踏み分けてるのは、鹿と考えられることもできる。そのために、猿丸大夫はどういう考えでいたのか詠んでみる。「もう秋も深くなった。彼はすでに孤独にも馴れてきた。不安は諦観（あきらめ）になり、かつやりきれなく思った山奥での孤独も、今は閑静を楽しむ心へ変わった。その彼の孤独を鹿が訪れる。カサカサと紅葉の落ち葉をふみ分けて、雌を求めて鳴いている。彼はかつて彼自身もあの様に悲しげな声で女性を求めて歌を歌ったことを思い出す。すべては紅葉の様に散ってしまった。今彼の前にあるものははてしない寂寥だけである。彼は世界の根底にある悲哀の声を聞いた思いであった。」このように世捨て人の立場として悲しい歌を作ったということも考えられる。最後に猿丸大夫の歌というものが最初に表れたのは11世紀の前半、藤原公任の選んだ「三十六人撰」においてである。「三十六人撰」において彼の歌とされるのは次の3首がある。

「をちこちの たつきもしらぬ 山中に おぼつかなくも よぶことりかな」  
「ひぐらしの なきつるなへに 日は暮れぬと みしは山のかげにざりける」  
「奥山の 紅葉ふみわけ鳴く鹿の 声聞くとときぞ 秋は悲しき」

三首共『古今集』にある「読み人知らず」の歌である。この三首の歌には共通な所がある。すべて山居の閑寂、孤独を歌ったものである。公任の頃に猿丸大夫という人物は山住いの隠遁者として伝えられていた。しかもその歌がどこにもない。それ故読み人知らずの歌の中で、山居の隠者の歌らしいものを『古今集』から撰んだのが、この「三十六人撰」

の猿丸大夫の歌になったのではないかと思われる。猿丸大夫と人麻呂は、その時代、その名前、その官位及び歌人としての名声に於いても同じなのである。一体、同じ時代に生き、同じ官職につき、同じようにすぐれた歌人としての名声をもち、しかも名前まで同じくする二人の人間を、どうして別々の二人の人間と考えられようか。(梅原猛『水底の歌』)梅原氏は、人麻呂と猿丸大夫が同一人物であった可能性を指摘されたが、学会において受け入れられるには至っていない。古代の律(刑法)に、梅原氏が推察するような水死説が存在していない事や、また梅原氏の言うように人麻呂が高官であったならば、それが『続日本紀』などに一つも残されていない点などに問題があるからである。この梅原説を基にして井沢元彦氏が『猿丸幻視行』を著している。

結局人麻呂は政治的犯罪を犯し、追放、流罪を言い渡され、最初は宇治田原の曾束<sup>そつか</sup>の山にて隠遁生活を送り、以後四国の挟岑島<sup>さきねの</sup>、そして最後に石見の鴨島へ流され、高津の海の藻くずと消えたと梅原氏は推論している。

#### 【参考文献】

- 1) 柳田国男 1963『定本柳田国男集第12巻』筑摩書房
- 2) 梅原猛 1981『水底の歌-柿本人麻呂論』新潮社
- 3) 井沢元彦 1983『猿丸幻視行』講談社文庫
- 4) 福井孝典 2003『天離る夷の荒野に』作品社
- 5) 三好正文 2000『猿丸大夫は実在した!!百人一首と猿丸大夫の歴史学』創風社
- 6) 篠原央憲 1976『いろは歌の謎』光文社
- 7) <http://www.myj7000.jp-biz.net/clan/01/012/01238.htm>
- 8) <http://www.k2.dion.ne.jp/~tokiwa/keifu/keifu-sarumaru.html>
- 9) [http://www.bell.jp/pancho/k\\_diary-6/2011\\_10\\_04.htm](http://www.bell.jp/pancho/k_diary-6/2011_10_04.htm)
- 10) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8A%A6%E5%B1%8B%E7%A5%9E%E7%A4%BE>
- 11) <http://yamatouta.asablo.jp/blog/2010/02/08/4866526>
- 12) <http://sacra-wako.cocolog-nifty.com/kikou/2010/08/-8-360d.html>
- 13) <http://scooby.blog.fc2.com/blog-entry-1050.html>
- 14) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9F%BF%E6%9C%AC%E4%BA%BA%E9%BA%BB%E5%91%82>
- 15) <https://www.nagaitoshiya.com/ja/2005/kakinomoto-hitomaro-umehara/>

(2016年10月24日、生活美学研究所本年度関西文化研究会における講演に基づく)  
コーディネーター 武庫川女子大学文学部教授 管 宗 次